

風景の中で ①

図書館長 井上 郷子

タイトルの「風景の中で」は、アメリカの作曲家、ジョン・ケージ (1912-1992) のピアノ曲《In a Landscape》(1948年作曲) からとりました。私は図書館で、ぼうっと館内の景色を味わう時があります。扉や窓を通して見える景色や光の中で、学生たちが歩く音、押し殺した声、書物や楽譜を眺めている姿、パソコンの機械音、職員が静かにでもきびきびと働く様子…それらは混ざったり分離したりして、時間と空間を切り取っていきます。《In a Landscape》の訳は「ある風景の中で」と「風景の中で」の両方が考えられ、実際、書物でも両方の訳が使われています。著者たちが「a」をどのように解釈しているのか、興味あるところです。

《In a Landscape》は私の大好きな曲のひとつで、日本だけではなく中東やアメリカでも演奏しています。この曲は最初から最後までダンパーペダルとソフトペダル両方を踏み込んだ状態で演奏されるため、響きが途切れることはありません。弾く音はその前の、その前の前の、その前の前の前の…響きをまといまわります。響きの中に音が溶け、その響きの中に次の音がふっと浮かびまた溶けていく…ののですが、使っ

ている音の数とピッチが限られているため、決してうるさくはならず、静かに、でも様々な変化を伴いながら音楽は進んでいきます。同じような音型が続く時、ふと、或る音が1オクターヴ低い音に変化したり、装飾音を伴って現れたり、3度違いの音が重ねられて出てきたりします。そういう箇所ではよく耳を澄ませ、ほんの少しの変化(1つの音!)があるだけで、どのように全体の響きが変わって聴こえてくるのか、よく聴くことが大切です。よく聴けるかどうかによっていい演奏かどうかが決まってきます。

ケージの、よく知られている《4'33"》も「聴くこと」を通して、音って何? 沈黙って何? 音楽って何? 聴くってどうすること? 更には、作曲する、演奏するってどういうこと? ピアノって何? 演奏会って何? などの様々な問いを私たちに投げかけています。ケージはとても真面目な人で、《4'33"》でも、彼独自の、手間がかかる作曲の方法を厳密に守っています。

図書館には、ジョン・ケージの楽譜、音源、著書、ケージに関する書物等が数多く収められています。興味を持った人はぜひ触れてみてください。

資料の部屋 ①

図書館 柄田 明美

平成から令和に元号が変わり、昭和がまた一つ遠い時代となりました。今回紹介する本は、その昭和の時代に幻の国産ピアノ「OHHASHI」を作り続けた技術者たちの話です。

このピアノを生み出したのは、明治生まれのピアノ製造技術者で調律師でもある大橋 幡岩 (はたいわ)。本書の著者は、「OHHASHI」ピアノを紹介され、その音色に感動し、関係者への取材を進めています。なぜ幻のピアノと呼ばれているのか。大橋はどのようにピアノ作りに取り組んだのか。何を信念としてピアノを作り続けたのか…。

黎明期のピアノ産業に飛び込んだ大橋の人生は、まさに日本のピアノ産業の歴史です。したがって本書は、大橋の人生の物語であり、日本のピアノ製造史の入門書でもあるのです。それにしても、この大橋をはじめとする明治の人々は、何と好奇心が豊かで、パワーがあるのでしょうか。私たちにとって最も身近な楽器でもあるピアノ。そしてさまざまなコンクールの舞台にも立つ、世界に誇る日本

のピアノ。こうした今があるのは、先人たちの人生をかけた思いとこだわりのおかげなのだと思つづく感じます。

著者の長井進之介氏は、国立音楽大学でピアノを学んだ卒業生。本書は長井氏のピアノへの思いと製造者のピアノづくりへの思いと重なって、できたものです。巻末には、取材の過程で集めたデータや写真、イラストが整理されています。専門用語には注がついており、ピアノの構造に詳しくなくても大丈夫。また、装丁もピアノへの愛があふれています。カバーのピアノの写真も素敵ですが、ぜひカバーをはずして本体の写真と見返り(表紙裏)も見てみてください。ほら、あなたの手の中に小さなピアノが…。



『OHHASHI
いい音をいつまでも』
長井進之介
創英社/三省堂書店 2019
請求番号●J135-320

つかだ あけみ ● 子どものころ、家に調律の方が来る日は、不思議の世界を見られる特別の日でした。